

天使のように美しく澄んだ瞳と お話しできる幸せ

坂田 良子

坂田助産院(静岡県浜名郡)

東海道新幹線の東京-大阪間のちょうど中間地点から北へ1.5 kmの静岡県西部に位置する浜名郡雄踏町は、現在人口1万4000人たらずの小さな町です。私はこの町で、1952(昭和27)年の春、助産院を開業しました。

町の南西は浜名湖にのぞみ、気候は温暖で、漁業と農業そして商工業と活気あるこの町は、平和でそのうえ人情も厚く、とても住みごこちよく私の自慢とするところです。また1949年の夏に「フジヤマのトビウオ」として世界の水泳界にその名をはせた古橋広之進選手もこの町で生まれ育ったそうです。私は結婚してこの町の住人となったわけですが、独特のなまりのある方言で何ともえない親しみを感じ、町のみんなが親戚関係にあるような錯覚を覚えます。

私がこのすばらしい町で開業した当時は人口もまだ1万600人程度で、先輩の助産婦が8人おりました。そして皆さんが生き生きと活躍していました。もちろん、お産は全部家庭分娩の時代でした。それから42年間、現在もまだささやかながらこの町の皆さんと共にこの道一筋に生きております。

戦中・戦後の思い出のお産

大東亜戦争から戦後にかけて、恩師のO先生のもとで助産婦としての勉強をさせていただきました。

終戦後間もないあの頃は、戦火で家を焼かれた被災者が横穴の防空壕などで生活していました。そのようなお宅でのお産に、先生のお供をしてう

かがったりしました。また、焼土と化した焼け跡へ間口3間、奥行2間位のいわゆる「千円バラック」という仮設住宅が市の幹旋で何十棟と建てられていましたが、そのようなお宅でのお産にも立ち会いました。

今にして思えば、そのような場所でのお産では声一つ出しても隣家に聞こえそうでした。まして家の中は荷物などで仕切っただけで隣りには何人もの家族が眠っている状態でした。そのような中で、ラマーズ法に等しい呼吸法、そして努責により、やがて湯気立つホカホカのベビーが元気よく産声をあげてくれるのです。その嬉しさ、すばらしさは助産婦ならではの味わえない感激です。人の心が殺伐としていた時に生命力や喜びを与えてくれるできごとに直接かかわれたことは、私自身にとっても本当に幸せなことでした。

戦中・戦後の食糧難は筆舌に尽くせませんが、当時はどの妊婦も栄養失調気味のため、生まれ出る児ももちろん小さかったように思います。今思えば、だから何とかお産も無事すんだような気がします。何しろ産婦と共に無我夢中の毎日でした。

「助けてください、神様！」

今でも忘れることができないお産の思い出があります。それは今からちょうど25年前の10月、開業17年目のことです。

2回目のお産をむかえるAさんのお腹の赤ちゃんは、俗にいう逆子でした。予定日1週間前の早朝、入院したい旨の知らせを受け、準備を整えて



待機をしている矢先、再度電話があり「トイレに行ったら児の片足が出てきた。とても入院はできそうもない」とのことでした。前もってAさんには逆子であることは知らせてあり、早めの入院をするよう伝えてありました。しかし破水と同時に表れた児の足にびっくりし、もう一歩も動けなくなったのです。

産婦の家まで約2kmの道のりをただひたすら母子の安全を願って、「どうぞ助けてください、神様！」と心の中で念じ叫びながら夢中で車を走らせました。産婦の家の玄関前にはエンジンがかけられたままの自動車があり、家の中では3歳の長女が何事が起こったのかわからないままに泣き歩き、ご主人はただうろたえておろおろしていました。そして当の産婦は「もうだめだ、赤ちゃんが死んでしまったよう」と訴えます。

児は、と見れば頸から上は母体内に、娩出されている両手両足はすでにチアノーゼが強く、湯気の立つどころか冷えきって冷たくなっています。人工呼吸などあらゆる方法をこうじて蘇生術を試みてもたのですが何の反応もありません。もうなかば諦めて一呼吸いれたその時、かすかに心臓部の皮膚が動いたような気がしました。「神様、どうぞ、どうぞこの児を助けてください！」と必死に祈りながら蘇生術を続けるうち、赤ちゃんの心臓がトキトキと動き出したではありませんか。続いて肺も働いて大きく吸気をしたと思ったら、咳きこむような第一声。だんだんとその泣き声も力強く、みるみるうちに皮膚はピンク色になりました。あの時の嬉しさ。思わず涙がこぼれました。経産婦

であったことと児が小さかったことが幸いし、臍帯の圧迫度が軽かったため助かったのだと思います。

それにしても児のはかり知れない生命力と助けていただいた神様に感謝し、今現在も忘れることのできない貴重な思い出となっております。

その思い出深いベビーも、今は心優しい立派な社会人として明るい毎日を送っています。

いのち続く限り この生きがいある仕事を

この町での最近の分娩数は、全国の減少傾向と同様、非常に少なくなっています。一時は年に250人余の出生数がありましたが、ここ1～2年は半分の110人前後となっています。そして分娩場所も医療機器の整った病院分娩が多くなっています。でもまだ開業助産婦が必要とされているのも事実です。

退院していくお母さんたちから「私がもう一人産みにくるまでこの助産院をやめないでね」といわれると、いのち続く限りこの仕事を続けようと力がわいてきます。そして今日も相変わらず町の皆さんから頼まれて、退院後の沐浴、乳房マッサージ、新生児訪問、家族計画指導などと動き回っています。これからも体力の続く限り素敵な出会いを求めてがんばりたいと心はずむ毎日です。

* * *

次は、娘の恩師であり北海道で活躍されているっしやる天使女子短期大学の和田サヨ子先生にお願いいたします。